

科学研究費助成事業（基盤研究（S））事後評価

課題番号	18H05280	研究期間	平成30(2018)年度 ～令和4(2022)年度
研究課題名	消化管の階層的粘膜支持関連システムによる粘膜防御機構の解明	研究代表者 (所属・職) (令和5年3月現在)	清野 宏 (千葉大学・未来医療教育研究機構・卓越教授)

【令和5(2023)年度 事後評価結果】

評価	評価基準	
	A+	期待以上の成果があった
○	A	期待どおりの成果があった
	A-	一部十分ではなかったが、概ね期待どおりの成果があった
	B	十分ではなかったが一応の成果があった
	C	期待された成果が上がらなかった
<p>(研究の概要)</p> <p>本研究は、腸管粘膜の恒常性維持機構について、粘膜免疫システムとそれを取り巻く粘膜外支持組織の相互作用に焦点をあて、「膵・腸臓器連関」、「腸管支持細胞連関」のふたつのプロジェクトを中心に展開された。細菌感染、抗菌ペプチド、炎症制御にかかわる新たな細胞集団の同定等、基盤的であると同時に、炎症性腸疾患など慢性疾患の予防、治療法の開発に繋がる応用的側面も有した研究となっている。</p>		
<p>(意見等)</p> <p>「膵・腸臓器連関システム」について、膵臓腺房細胞から分泌される Glycoprotein 2 (GP2) の腸管における細菌防御機構を中心に解析が進められた。その結果、GP2 とバクテリアトランスロケーションの関連、クローン病患者における抗 GP2 抗体の意義、GP2 の産生制御メカニズムの解明など、膵と腸の臓器連関に新しい知見が見いだされた。また、「腸管支持細胞連関システム」について、腸管の解剖学的なレイヤーごとに細胞集団を分離する手法を確立し、それに基づいた細胞あるいは細胞集団単位の遺伝子解析を行っている。その結果、上皮幹細胞の維持や炎症からの粘膜修復に関わる間葉系細胞の意義、新しいパネート細胞のサブセットなどが検討され、将来的にヒトの疾病治療につながる可能性のある知見が見いだされた。新型コロナウイルス感染症拡大や動物飼育施設の汚染等に大きく影響されることなく、総じて当初の目的、計画に基づいて研究が遂行された。研究成果に基づいた今後の発展が期待される。</p>		